

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成22年度)

事業名称	「伊藤若冲-アナザーワールド-」展
企画(事前)	
目的・内容	伊藤若冲(1716-1800)は近年大規模展が相次ぎ、一般の美術愛好家にも広くその名を知られる存在となった。しかし、その作品に関しては華麗な着色作品を中心に語られることが多く、遺作の大部分を占める水墨画については未だ必ずしも正当な評価を得ているとは言えない。本展は若冲の水墨画を中心に構成し、新資料も交えながらその知られざる魅力に迫る。
期待される成果	・遺作の大半を占める水墨作品をなおざりにした若冲評価は、正当な作家評価とは言えない。水墨作品の再評価は、偏重の無い作家の実像を明らかにしてくれるだろう。 ・新たな資料・作品を紹介することで、作家・作品研究はもとより、広く文化史上における若冲の位置を探る手がかりを提示することができると考えられる。
指標(数値目標)	観覧者数 21,000人、作品やテーマに興味を持った人の割合 88.0%
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 21,000人 ・歳出 10,000千円 ・歳入 7,854千円 ・特財率 78.5%
広報戦略	・工事休館後最初の特別展であることから、リニューアルオープン記念展と位置付け、全館的な体制で広報を展開する。 ・地元テレビ局との共催展であるので、CMスポットを中心に早期から広報を展開する。 ・後援の各新聞社紙面、そのほか美術雑誌等への掲載依頼を積極的に行っていく。

部署	学芸課	記入日	企画 平成22年4月1日
担当者名	福士(石上)		総括 平成23年3月31日
実施日・場所	4月10日(土)~5月16日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	(有) ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品調査・選定、出品交渉、カタログ執筆、作品借用
マスコミ等による共催の有無	(有) ・ 無	巡回の有無	(有) ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	水墨画を中心に、代表作のみならず新出作品も数多く出品することができたという点では、当初の目的は十分に達成されたと言える。さらに、それらを着色画との比較のうちに捉えることで、水墨画の面白さをより鮮明に浮かび上がらせることができた。また、先行する関連作品によって若冲の水墨画をより広い文脈から捉える試みも、ある程度成功をおさめたと考えている。いくつかの新出作品については、展覧会開幕直後の学会で早速言及されるなど、研究上注目されるものもあった。
アンケートにみる特徴	・県外からの新規来館者が多かった(44%、平均は20%程度)。 ・テレビをきっかけとして来館された方が多い(35%、平均は20%程度)。 ・全体的な満足度が高い(93.5%)
指標に基づく成果	観覧者数 54,937人(262%)、作品やテーマに興味を持った人の割合 93.1%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	・若冲の水墨画を軸としたところが良く、展覧会の章立ても理解しやすかった。図録はボリュームに圧倒されるが、担当者の研究成果が盛り込まれているもので評価できる。(金原) ・水墨画をメインとした企画が良かった。出品作は充実していたが、鶴亭ら若冲前史の部分をもっと手厚くしても良かったのでは。特に、伏山の水墨画は出品すべきだった。図録は充実した内容で、このような大部な図録の売れ行きが気にかかる。(榊原)
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 54,937人(目標 21,000人: 262%) ・歳出 8,275千円(予算 10,000千円:82.8%) ・歳入 22,956千円(目標 7,854千円:292.3%) ・特財率 277.4%(目標 78.5%)
今後の改善点・課題	・展示替え作品が予想以上に多くなった。数を多く集めることも一つの目的ではあったが、もう少し絞り込むことも可能であったかもしれない。 ・1章(若冲前史)の出品作品については、必ずしも若冲との関連を指摘できるものばかりではなかった。この点を含め、もう少し作品セレクトについての議論ができれば良かった。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成22年度)

事業名称	「トリノ・エジプト」展
企画(事前)	
目的・内容	イタリア、トリノにあるエジプト博物館は、エジプト本国を除けば世界有数のエジプト美術の所蔵館である。同館からの作品約120点を展示することで、時代、地域共に現代日本とは隔たった古代エジプト文明を紹介し、人類が開花させてきた文明の広がり、興行をお客様に感じていただく。展示作品には大型彫像やミイラ、彩色木棺やパピルス、ステラなど、幅広い内容が含まれている。
期待される成果	エジプトという異文化への興味が喚起されると共に、美術館への来館回数の少ない層へ訴えかけ、美術館施設の周知を図ることが出来る。
指標(数値目標)	観覧者数 83,000人
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 83,000人 ・歳出 17,000千円 ・歳入 16,074千円 ・特財率 94.6%
広報戦略	会期冒頭が梅雨時期であり、出足の来場者数が見込み難いことから、宣伝告知を通常の展覧会より早めに露出させた。テレビでの告知は4月の2週目から既に行なわれる。また広報と普及両方の目的を兼ね、県内の東部、中部、西部それぞれへ出張の展覧会講演会と実技講座とを実施する。

部署	学芸課	記入日	企画 平成22年4月1日
担当者名	新田(南、泰井)		総括 平成23年3月31日
実施日・場所	6月12日(土)~8月22日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	
マスコミ等による共催の有無	有 ・ 無	巡回の有無	有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	アンケートを取られていないが、展覧会を紹介したブログからは、展覧会の意図が十分に伝わっていると判断し得た。目的は達成されたと思われる。
アンケートにみる特徴	
指標に基づく成果	観覧者数 139,355人(167.9%)
研究活動評価委員会からの意見(要約)	
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 139,355人(目標 83,000人: 167.9%) ・歳出 15,566千円(予算 17,000千円: 91.6%) ・歳入 32,845千円(目標 16,074千円: 204.3%) ・特財率 211.0%(目標 94.6%)
今後の改善点・課題	会期中、1日の入場者数が3,000人近くなると、展示室内炭酸ガス濃度が上がり、温湿度管理との調整が難しくなる。空調システムが改善されることが望ましい。駐車場の案内には綿密なプランが構想されたが、現場の差配が必ずしも機能しなかったのは残念である。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成22年度)

事業名称	「ロボットと美術」展
企画(事前)	
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1920-30年代のロボットブームと同時代の前衛芸術に示された身体観に共通する時代意識を探る。</li> <li>・戦後大衆文化に引き継がれ、さらに日本で独自の深化を遂げたロボット文化と、その結実としてのロボティクスの成果、さらには現代アートにおけるロボットの表象を一堂に示してみせることにより、アート/サブカルチャーの垣根を越えた「身体」「機械」といった問題への作り手たちの問いかけを再考してみる。</li> </ul>
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ともすれば「科学館の狂言回し」「オタク文化のヒーロー」といった水準でしか見られないロボットという文化的現象が投げかける問題について、あらためて考える機会を提供する。</li> <li>・静岡市が誘致した東静岡駅のカンダム像目当てで来静したロボットファンを美術館へ引き寄せる。</li> </ul>
指標(数値目標)	観覧者数 15,000人、作品やテーマに興味を持った人の割合 88.0%
収支(予算)/観覧者数(見込)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観覧者数 15,000人</li> <li>・歳出 17,870千円</li> <li>・歳入 8,300千円</li> <li>・特財率 46.4%</li> </ul>
広報戦略	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SBS静岡放送グループの広報力を利用した紙面と電波による広報。</li> <li>・ロボットと美術展実行委員会で作成する展覧会ホームページ等による草の根的ウェブ広報。</li> </ul>

部署	学芸課	記入日	企画 平成22年4月1日
担当者名	村上(堀切)		総括 平成23年3月31日
実施日・場所	9月18日(土)~11月7日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	(有) ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品調査・選定、出品交渉、カタログ執筆、作品借用
マスコミ等による共催の有無	(有) ・ 無	巡回の有無	(有) ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究活動評価委員のコメントからも、企画の内容についてはおおむね目標を達成できたのではないと思う。</li> <li>・戦後の美術界ではロボットがほぼ問題にされなくなるという企画側の歴史観から、戦後についてはサブカルチャーの出品物が多くなったが、委員の指摘するとおり、SF戦闘ロボット以外の戦後ロボットイメージについては考察の余地がある。</li> <li>・『読売新聞』(12月16日付)で中原佑介氏が本展を今年の展覧会ベスト4に推挙した。内容について専門家の一定の評価を得たと捉えることができるのではないかと。</li> </ul>
アンケートにみる特徴	<p>男性(51.8%)、若年層(30代以下が61.6%)、県外来館者(16.7%)が多い。また、新規来館者に占める県外来館者割合が高い(47.5%)。</p> <p>総じて、当館のオソドックスな客層の逆を行くタイプの観衆を動員しているといえる。それ自体は善し悪しで評価できるものではないが、他の展覧会と補完しあうという意味で好意的に評価できるだろう。満足度も90.0%を達成し、新規客の多くに満足体験を与えることが出来たのではないだろうか。</p>
指標に基づく成果	16,197人(目標 15,000人:108.0%)、作品やテーマに興味を持った人の割合81.3%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美術という枠組みがかかえる今日の問題、科学技術の産物と人間の生活がいかに並び立つかといったことを含め、多くのことを考えさせる展覧会。ただし、狭義の美術の範疇にある戦後作品と機械的身体イメージを考察する一面があってもよかった(山梨)</li> <li>・「機械と人間」は近代における巨大なテーマであり、ロボットを取り上げたことは評価できる。戦前部分についての資料興味深かった。戦後については、SFの戦闘ロボット以外の側面をもっと観たかった。(坂本)</li> </ul>
収支(決算)/観覧者数(実績)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観覧者数 16,197人(目標 15,000人: 108.0%)</li> <li>・歳出 15,172千円(予算 17,870千円: 84.9%)</li> <li>・歳入 8,113千円(目標 8,300千円: 97.7%)</li> <li>・特財率 53.5%(目標 46.4%)</li> </ul>
今後の改善点・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イベントが開幕直後に集中したため、中だるみとなる中盤の集客に利用できなかった。講演者の割合もあるが、分散させた方がよかった。</li> <li>・学生無料のうえ、若年層も十分楽しめる内容であったため、市内の中高生に対し学校を通じてひとり一枚のピラを配るくらいのPRをしてもよかった。</li> <li>・アンケートでも指摘されたとおり、動くロボットが少なかった。これについては、技術者帯同などの条件を満たすことが必須となるが、その人件費を見込んでいなかった。こういった点については予算策定段階で予見して手厚くする必要があった。</li> </ul>

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成22年度)

事業名称	「出会えます。あなたの愛する風景」展
企画(事前)	
目的・内容	・当館収蔵品の核である風景画を中心に、コレクションの特質をアピールする。 ・西洋画を中心に、日本画・日本洋画などの全ジャンルの作品に加え、現代写真の寄託品も併せて展示し、コレクションの幅の広さを見せる。
期待される成果	・「風景の美術館」としての再認知。
指標(数値目標)	観覧者数 13,000人、作品やテーマに興味を持った人の割合 88.0%
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 13,000人 ・歳出 5,930千円 ・歳入 4,244千円 ・特財率 71.6%
広報戦略	静岡第一テレビのバックアップによる特別広報。

部署	学芸課	記入日	企画 平成22年4月1日
担当者名	南(泰井・石上・川谷)		総括 平成23年3月31日
実施日・場所	11月16日(火)～12月23日(木・祝) 静岡県立美術館第1～6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	(有) ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品選定、解説執筆、作品借用
マスコミ等による共催の有無	(有) ・ 無	巡回の有無	有 ・ (無)

総括(事後)	
目的の達成度	当館の収蔵品全ジャンルと現代美術の寄託品を併せて展示・構成することにより、幅広いコレクションの魅力を前面に押し出すという当初目的は達成されたと思われる。
アンケートにみる特徴	①来館者の比率を見ると、女性が68%、静岡市内の居住者が48%、来館回数が「3～5回」が28%と、多数を占めている。また、県外からの新規来館者が45%と、全体の半分近くを占めている。 ②「作品やテーマへの興味・関心の高まり」に対し肯定的な回答が81%、また「心地よく鑑賞」できたかについても92%の回答を得ているので、鑑賞環境や展示構成への満足度は高かったと思われる。それは、「全体的な満足度」に88%以上の肯定的回答を得ていることから判明する。
指標に基づく成果	観覧者数 8,417人(64.7%)、作品やテーマに興味を持った人の割合 81.2% (「どちらかというといはい」49.4%、「はい」32.0%を加算)
研究活動評価委員会からの意見(要約)	・“あなたの愛する風景”展は収蔵品展に味つけをして多くの県民に見てもらいたいという意図があろうと思われる。このことは今後の収蔵品展のあり方を示すもので評価できる。プーシェの2点をより理解させるため、フランス・ロココの作家たちの個人所蔵の作品が展示され、時代背景がより分かりやすくなっていった。日本の山水画、風景画との成立のちがいなども考えさせるもので、昨年秋の「ロボットと美術」のマンガやアニメが日本の表象文化を考えさせてくれたのとよき対照となっていた。(金原委員) ・貴美術館の収集方針、活動方針に沿った収蔵作品、それもきわめて良質の収蔵作品を展示公開して、日本人に身に着いた楽しみの一つである風景、山水に遊ぶことを誘う展覧会として成り立っているものと理解しているが、個々の作品解説ではなく(これは充実している)、展覧会全体を読み解く指標を、もう少し鮮明に打ち出してもよかったのではないだろうか。もちろん、描かれた東西の自然を楽しんでください、だけでもいいとは思いますが、これなら、画切れよく、押しつけがましく言った方がよかったのではないか。(潮江委員)
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 8,417人(目標 13,000人: 64.7%) ・歳出 5,404千円(予算 5,930千円: 91.1%) ・歳入 2,444千円(目標 4,244千円: 57.6%) ・特財率 45.2%(目標 71.6%)
今後の改善点・課題	①県外からの新規来館者が45%に達しているため、ここからの「来館のきっかけ」を分析すれば、今後の広報計画の一助になるとと思われる。 ②来館者の満足度は比較的高かったが、入場者数は伸び悩んだ。広報面での第一TVによる積極的なバックアップも得たため、この原因は、当初の目標が高すぎたためと考えられる。予算面だけではなく、過去の展覧会の会期の時期、内容・構成などを鑑みた上で目標設定が必要と思われる。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成22年度)

事業名称	「帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション」展
企画(事前)	
目的・内容	若冲、琳派、禅画など、ニューオーリンズ在住の医師ギッター夫妻が収集したユニークな江戸時代の絵画を以下の構成により展覧。第一部①若冲と奇想の画家たち②琳派③禅画、第二部①自然との親しみ②理想の山水③楽しい人生 102点の江戸絵画が一挙見せられ公開される。
期待される成果	・アメリカ人が収集した江戸絵画コレクションを通して、日本美術の魅力を再発見する。 ・江戸絵画の世界を多角的に紹介する機会となる。
指標(数値目標)	観覧者数 17,000人
収支(予算) /観覧者数(見込)	・観覧者数 17,000人 ・歳出 20,000千円 ・歳入 9,700千円 ・特財率 48.5%
広報戦略	・NHKの放送メディアを有効に活用した広報を展開する。 ・静岡中部に偏らず、東部・西部からの集客を増やすことを目指す。

部署	学芸課	記入日	企画 平成22年4月1日
担当者名	飯田(石上)		総括 平成22年4月28日
実施日・場所	2月5日(土)~3月27日(日) 静岡県立美術館第1~6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	(有) ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	解説執筆
マスコミ等による共催の有無	(有) ・ 無	巡回の有無	(有) ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	・観覧者数が会期後半伸び悩み、目標の76.2%にとどまったが、これは震災による影響が大であり、その影響がなければ目標を達成したのと思われる。 ・内容面においては、アメリカ人が蒐集した個性的なコレクションにより、江戸絵画の多様性を紹介することができ、観覧者には、日本美術の魅力の再発見に資するものを提供できた。
アンケートにみる特徴	
指標に基づく成果	観覧者数 12,955 人(76.2%)
研究活動評価委員会からの意見(要約)	
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 12,955人(目標 17,000人:76.2%) ・歳出 千円(予算 20,000千円: %) ・歳入 7,474,800円(目標 9,700千円:77.1%) ・特財率 %(目標 48.5%)
今後の改善点・課題	・魅力あるコレクション展であったが、広報として打ち出す目玉作品を決め切れず、広報戦略に苦労した。今後は、ストーリー作りなど事前に計画する必要がある。またメディアへの露出も多いとは言えなかった。共催者との綿密な打ち合わせに欠けていたことは、今後の課題である。 ・話題を呼ぶ展示手法を取り入れるなど、展示面での工夫も今後の課題である。